

宮古島の忠導氏正統仲宗根家と多良間島塩川の忠導氏支流富盛家の位牌から見える  
八世狩俣首里大屋子玄易と宮古での室、多良間島での妻について

はじめに

多良間村教育委員会では、二〇一八（平成三十）年度から沖縄県の一括交付金を活用して、「多良間村自然文化継承事業 郷土資料整理活用業務」を実施している。当該事業は「多良間村ふるさと民俗学習館所蔵資料の整理、修復・保存及び電子化作業・現代語作業を行い、村内外に発信・活用することによって、ふるさと民俗学習館の活性化はもとより、地元の歴史を知る学習の場・島外の人々に対して、多良間村の観光スポットとして、多良間の歴史文化に興味を持った方が多く訪れる場所となること。また、ふるさと民俗学習館内において現代語訳作業及び来館者に展示資料の解説等を行うことにより、人材育成の場となること」を目的とし、①館所蔵資料の修復及びカビ臭除去クリーニング、②同資料の電子化（カラースキヤニング）、③同資料の複製本作成（和紙出力・和綴じ製本）、④同資料の翻刻・現代語訳作業を実施している。

筆者は、戸籍や宗門手札改を研究する中で<sup>1</sup>、『多良間村史 第二巻 資料篇1 王国時代の記録』に翻刻された明治十年の『塩川村丑年惣頭帳』や同二十一年の『仲筋村子年惣頭帳』<sup>2</sup>に着目し、本事業においてその分析を行っているところである。

事業一年目の二〇一八（平成三十）年七月七日には、土地整理後の明治三十五年時点の所有者の番地と氏名を落とし込んだ地図を基



写真1 忠導氏支流富盛家の御霊前の状況

金城 善（元糸満市立中央図書館長）

墓に、文化財保護委員の方々に案内していただきながら字仲筋を巡見し、『仲筋村子年惣頭帳』に記載されている人々と居住地域の小地名の特定に努めた。

二年目の二〇二〇（令和二）年二月二十五日から二十七日には、字塩川を巡見し、同様に『塩川村丑年惣頭帳』に記載されている人々と居住地域の小地名の特定に努めた。

その巡見の途中で、字塩川一〇五番地のインネーウエーキヤー（西のおやけ屋）と呼ばれる富盛家を訪ねることができた。

筆者は位牌にもたいへん関心があつて、これまでもいくつかの調査報告を行ってきたところであり<sup>3</sup>、当主の富盛玄三氏のご協力を得て、古い先祖の位牌を調査することができた。

写真1に見るように、富盛家の御霊前には、正面に煤けた古そうなガーナーイーフェーが、箱状の入れ物の中に安置されている。



写真2 厨子の中の様子、格子の奥に位牌が見える

これには、白い紙が貼られていて、中央に「帰元狩俣筑登之親雲上靈位」、その右側には「常令」、左側には「タケ／玄正／ハル」と書かれている。

位牌自体にはどのように記載されているかは、確認することはできなかった。

その箱状の右側には、木製の厨子があり、これは今まで開けたことがないので、何が入れているかはわからないということであった。手を合わせ、恐る恐る開けてみたら、写真2に見るとおり、格子状の仕切りの奥に位牌らしきものが確認できた。

まずはその格子状の仕切りを取り出し、次いで奥の位牌を取り出して状態を確認したのが、写真3である。

その位牌には、表に四人の戒名、裏に一人の死去年月日が刻まれていた。これを野帳にメモし、『多良間村史 第二巻』に収録された『忠導氏系図家譜支流』（富盛家）<sup>4</sup>と照合して見ると、一人の戒名が富盛家初代の狩俣筑登之親雲上玄陳の号「実運快盛」と合致



写真3 富盛家の位牌（表）四人の戒名が刻まれている

写真5 床の間の厨子の中の石像



写真4 富盛家の位牌（裏）一人の死去年月日が刻まれている

忠導氏支流富盛家とその位牌については、後で述べることにする。富盛家には、御霊前の位牌とは別に、床の間にも御霊前にある厨

した。

写真6 石像の奥にある位牌（右表・左裏）



子と同じような厨子の中に、写真5の七福神の寿老人の石像があり、その奥にもう一つ位牌が安置されていた。石像と位牌とは直接的には関係がないと思われる。

厨子の奥から位牌を取り出してみたら、写真6のような彩色が施されたきれいな位牌であった。これについても後で述べる。

本稿では、宮古島の忠導氏正統仲宗根家と多良間島塩川の忠導氏支流富盛家の位牌を翻刻するとともに、仲宗根家の『忠導氏系図家譜正統』や富盛家の『忠導氏系図家譜支流』、垣花家の『浦渡氏系図家譜正統』から関係する人物について抜き出し、八世狩俣首里大屋子玄易や宮古での室、多良間島での妻について、考察してみたい。

一 忠導氏正統仲宗根家の大位牌とその家族

筆者は、かつて祥雲寺の岡本恵昭師を訪ねて、糸満市字糸満の蓮華禅院との関係を伺ったときに、目の前にある大きな位牌を写真に撮らせていただいた。そのときの写真7には、両側に二つの位牌も写っていた。

忠導氏正統仲宗根家の位牌は、大きな位牌とは別に、その後の二つの位牌があり、多くの宝物とともに、現在は宮古島市総合博物館に寄贈され、大切に保存されている。

同博物館の「図録 第一集一旧家資料編一」の資料目録を見てみると、「H 79 位牌」「H 80 位牌」「H 81 位牌」の資料名で管理されているようである。

「H 79 位牌」は備考に「元祖から8世まで」と附記されているので、あの大きな位牌のことだと思われる。同図録の「3. 参考資料」に「③忠導氏正統大外間「位牌」(元祖く8世まで)」として、写真8の大きな位牌に刻まれた戒名・官名・字名・名前・世・生年・卒年が記載されている。

「H 80 位牌」は、「④忠導氏正統大外間「位牌」(九世く十三世まで)」とある。

「H 81 位牌」については、特に何も記載されていない。

本稿では、写真9の大きな位牌の裏面の銘文に「本孫松原宗相信士、立大位牌謹奉祭祀」と刻されていることから、「忠導氏正統仲宗根家の大位牌」と称することにする。

「忠導氏正統仲宗根家の大位牌」は、一枚の板に元祖仲宗根豊見親玄雅と室の大阿母宇津免嘉を中心に、右側に八名の男性と左側に八名の女性の戒名(道号・戒名・位号)が、左右に一段ずつ下げて



写真7 祥雲寺で預かっていたころの忠導氏仲宗根家の位牌

写真8 忠導氏仲宗根家の位牌(表) 宮古島市総合博物館蔵



山形になるように配置され、戒名の下には官名と字(あざな)が二行に分けて刻銘されている。女性はそのみの場合もある。左に翻刻を示す。下段に系図家譜の世代と職・名乗・卒年月日を表示した。正面の上部には、火炎宝珠の中に「元祖」の文字が刻まれ、その下を這うように瑞雲が左右に延びる。右の瑞雲に「歸」、左の瑞雲に「眞」が刻まれている。

「元祖」の下、中央の一番高い所に記載されているのは、元祖の仲宗根豊見親玄雅と室の大阿母宇津免嘉の夫婦である。玄雅の戒名

写真9 忠導氏仲宗根家の位牌(裏) 宮古島市総合博物館蔵



は「徳巖義本居士」である。官名として「中宗根豊見也」とあり、字は「空廣」と記されている。室の宇津免嘉の戒名は「浄安妙心禅定尼」で、官名は「豊見也大阿母」で、字は「宇津免嘉」とある。二世は、八重山豊見親玄数と室の免嘉の夫婦と、玄雅の四男で玄数の弟である平良親雲上玄屯が刻まれている。

玄数の戒名は「義伯宗休禅定門」である。官名として「八重山豊見也」とあり、字は「祭金」と記されている。室の免嘉の戒名は「浄信祖入禅定尼」で、官名はなく、字は「系図家譜」には免嘉と

### 歸

潮音慧海禪定門 官名 狩俣大首里大屋子 字 武佐 康熙三十八年行方不明、享年五十二

松岩宗榮禪定門 官名 平良大首里大屋子 字 武佐 康熙三十二年十二月十一日卒、寿七十三

素實道撲信男 官名 島尻首里大屋子 字 馬子盛 順治四年十月十五日卒、享年四十六

海月一空禪定門 官名 新里與人 字 空廣 万曆四十五年卒、享年四十五

義翁宗貞信男 官名 平良大首里大屋子 字 武佐 万曆五年卒、享年四十二

以傳道授禪定門 官名 西中宗根與人 字 空廣 八重山豊見也嫡子 嘉靖十九年卒、享年四十九

綠溪良因信男 官名 平良大首里大屋子 字 馬子 義本居士四男 祭金二弟 嘉靖年間卒

義伯宗休禪定門 官名 八重山豊見也 字 祭金 嘉靖年間卒

徳巖義本居士 官名 中宗根豊見也 字 空廣 元祖仲宗根豊見親玄雅 嘉靖年間卒

浄安妙心禪定尼 官名 豊見也大阿母 字 津免嘉 元祖仲宗根豊見親玄雅室大安母宇津免嘉 嘉靖年間卒

浄信祖入禪定尼 字 邊計真良 二世八重山豊見親玄數室免嘉 嘉靖年間卒

妙雲惟靈禪定尼 字 邊計真良 「系図家譜」に記録がなく、誰の位牌か不明

高臺智鏡禪定尼 字 邊計真良 三世西仲宗根與人玄保室辺計真良 嘉靖二十六年卒、享年五十四

妙定元修信女 官名 外間大阿母 字 保那人盛 四世平良親雲上玄守室大安母保那人盛 万曆四十四年卒、寿七十三

光譽妙清禪定尼 字 保名利免嘉 五世新里與人玄與室保那利 万曆四十一年卒、享年三十八

梅窓妙香禪定尼 字 保名人 六世島尻首里大屋子玄恒室保那人 天啓七年卒、享年二十七

花心淡月禪定尼 字 邊計真良 七世平良親雲上玄淑室免娥 康熙二年三月五日卒、享年四十三

南林妙薰禪定尼 字 嘉免 八世狩俣首里大屋子玄易室龜 雍正八年十月十五日卒、享年五十二

### 元祖

### 神位

### 眞

あるが「邊計眞良」と記されている。

もう一人の二世平良親雲上玄屯の戒名は、「緑溪良因信男」である。官名として「平良大首里大屋子」で、義本居士四男  
祭金二弟とあり、元祖玄雅の四男で、二世玄数の弟であることも記されている。字は「馬子」とある。

玄屯の室は「系図家譜」には記録がない。玄屯に対応する形で記された女性は、字が「邊計眞良」で、戒名が「妙雲惟靈禪定尼」と刻まれている。それは誰であろうか。

三世は、西仲宗根與人玄保と室の辺計眞良の夫婦である。玄保の戒名は「以傳道授禪定門」である。官名として「西中宗根與人」とあり、字は「空廣」で、「八重山豊見也嫡子」と記され、二世玄数の長男であることも記載している。室の辺計眞良の戒名は「高臺智鏡禪定尼」で、官名はなく、字は「邊計眞良」とある。

四世は、平良親雲上玄守と室の保那人盛の夫婦である。玄守の戒名は「義翁宗貞信男」である。官名として「平良大首里大屋子」とあり、字は「武佐」と記されているが、「家譜系図」には「馬之子」とある。室の保那人盛の戒名は「妙定元修信女」で、官名は「外間大阿母」で、字は「保那人盛」とある。

五世は、新里與人玄與と室の保那利の夫婦である。玄與の戒名は「海月一空禪定門」である。官名として「新里與人」とあり、字は「空廣」と記されている。室の保那利の戒名は「光誓妙清禪定尼」で、官名はなく、字は「保那利免嘉」とあり、保那利に免嘉が付いている。

六世島尻首里大屋子玄恒と室の保那人の夫婦である。玄恒の戒名は「素實道撲信男」である。官名として「島尻首里大屋子」とあり、字は「馬子盛」と記されているが「家譜系図」には「馬之子」とあ

る。室の保那人の戒名は「梅窓妙香禪定尼」で、官名はなく、字は「保那人」とある。

七世は、平良親雲上玄淑と室の免娥の夫婦である。玄淑の戒名は「松岩宗榮禪定門」である。官名として「平良大首里大屋子」とあり、字は「武佐」と記されている。室の免娥の戒名は「花心淡月禪定尼」で、官名はなく、字は「邊計眞良」とあるが「家譜系図」には「免娥」とある。

八世は、狩俣大首里大屋子玄易と室の龜の夫婦である。玄易の戒名は「潮音慧海禪定門」である。官名として「狩俣大首里大屋子」とあり、字は「武佐」と記されている。室の龜の「系図家譜」での戒名は「良珍」であるが、「南林妙薰禪定尼」と記載されている。官名はなく、字は「嘉免」とある。

下部には沈金と朱・緑の漆絵で蓮華文が描かれ、その花の上に「神位」が刻まれている。

位牌の裏面には、一七一五（康熙五十四）年仲春に、龍宝山祥雲寺の得隨長老が誌した銘が、句読点なしで連続して刻まれている。ここでは、理解しやすく句読点で区切り、後半の七言絶句は七文字で揃えた。

松原宗相信士、一日過我山中見訪從容謂云。

我崇祖豊見也、暨子孫有虧法名道号者。

願為之安名、余不獲固辞、報染豪書之。

況豊見公有忠烈、嘗航海為中山府君見寵愛。

恩殊殊渥、以故号徳巖居士。積善第一家也。

蓋賦俚言三章用羨。

之網故者別有家譜、又有後人傳載口碑爰不贅矣。

詩云、

蓋世功名誰不知  
況將忠節進丹墀  
威言勇力過人處  
掃蓋千軍寧見危

其二

乘槎破浪入琉球  
一片丹衷曾未休  
貢物累年從此始  
奉君之意重林丘

其三

巖□劫石了無磨  
鐵石身心趣轉多  
二百餘春骨未汚

孤墳普得鎮山河

大清康熙五十四年乙未仲春

現住龍寶山祥雲禪寺

沙門慧心得髓、盥沐誌焉

末孫松原宗相信士立大位牌謹奉祭祀

『宮古島市総合博物館図録 第一集 旧家資料編一』四五頁

この裏面の銘文を読み下すと、次のとおりである。

松原宗相信士、一日（先日）我が山中を過ぎて訪ねられ、從容（ゆつたり）として謂ふ云。

我、祖豊見を崇ぶや、子孫に法名・道号を虧く者有るに暨ぶ。願わくは、之が為に安名せんと。

余、固持するを獲ず、染みに報いて、豪ひて之を書す。

況や豊見公忠烈あり。嘗て中山公のために航海して寵愛さる。恩榮殊に渥く、故を以て徳巖居士と号す。積善第一の家なり。蓋し、俚言三章を賦して用いて、之を羨ふ。

故を綱ぐ者は、別に家譜あり。

また後人の伝ありて口碑に載るも、爰に贅らず。

詩に云ふ

世を蓋ふ功名 誰か知らざらん  
況や忠節を將て丹墀に進む  
威言勇力は人に過ぐる処  
千軍を掃蓋して見危を寧んず

其の二

槎に乗り浪を破りて琉球に入り  
一片の丹衷 嘗て未だ休まず

貢物累年 此より始まり

君の意を奉じて林丘を重ぬ

其の三

巖□劫石 了として磨するなく

鉄石の身心 趣転多し

二百余の春にも骨未だ汚れず

孤墳普く山河を鎮むるを得

大清康熙五十四年乙未仲春 現住龍宝山祥雲禪寺

沙門慧心得髓、盥沐して誌す焉。

末孫松原宗相信士 大位牌を立て謹んで祭祀を奉る。

この裏の銘文を解説してみる。

これを誌したのは、宮古島の龍宝山祥雲禪寺の住職の沙門慧心得髓長老である。『宮古島在番記』によれば、得髓長老は康熙五十一（一七一二）年壬辰年から同五十五（一七一六）年丙申までの住持で、病氣により翌五十六年丁酉に帰国したとある。

この得髓長老のところに、ある日松原宗相信士（九世松原首里大屋子玄邑）が訪ねて来て、ゆつたりと言うには、私は始祖である仲宗根豊見親を崇めて（あが）いるが、その子孫には法名や道号がない者がいるので、禅宗の法に基づいて、新たな得度受戒をして、法名・道号を付与してほしいと願いだした。

これに対し、得髓長老は固辞したが、馴染みということで、少し書くことにした。

豊見親はきわめて忠義心が厚く、かつて海を渡って中山王に奉告し、そして寵愛された。その恩栄は特に手厚く、それゆえ「徳殿居士」と号した。善を積むことが第一である。

けだし、俚諺三章から後の銘文は、仲宗根豊見親玄雅の長男の金盛豊見親の話であろうか。忠導氏の本宗を継がず、西外間に分家させられ、小祖として別家譜を編集し、ここには祀られないということである。

三編の七言絶句が添えられている。

この大位牌は、八世狩俣首里大屋子玄易が一六九九（康熙三十八）年に死去してから一六〇六年後の一七一五（康熙五十四）年に、玄易の嫡子である九世玄邑が、松原首里大屋子のときに建立し、謹んで祭祀を行ったものである。

『忠導氏系図家譜正統』や仲宗根家（大外間）の位牌には、玄邑の号は「呑海道鯨（居士）」とあるが、これには「宗相信士」と見える<sup>7</sup>。

このように『忠導氏系図家譜正統』に記された字と位牌に刻まれた字が、異なっているのが多い。また、家譜には記載がないが、位牌には刻まれている者がいる。

位牌を建立したのが一七一五（康熙五十四）年で、『忠導氏系図家譜正統』の成立は、玄邑の嫡子狩俣親雲上玄賢の序文によれば、一七五七（乾隆二十二年）年丁丑十月吉日である。四二年後に成立した家譜の記載は、位牌の銘などを基に記載したと思われるが、これと異なるのはどう考えたらよいのだろうか。今後の課題である。

この位牌を建立したときは、八世玄易の室の亀は健在であり、左端は亀の戒名や字が刻銘できるように開けられていたものと思われる。位牌を建立されてから一六〇六年後の雍正八（一七三〇）年に亀が死去したので、戒名と字を追記して刻銘したものと考える。この部分だけ字の雰囲気が異なっているように思われる。

## 二 忠導氏支流富盛家の家族

多良間島忠導氏支流富盛家は、宮古島忠導氏正統仲宗根家（大外間）の八世洲鎌与人玄易が、多良間島詰役の時、旅妻である多良間島の浦渡氏洲鎌目差常□<sup>8</sup>の女子免加との間に、一六七七（康熙十六）年丁巳二月十六日に出生した男子坊坐を初代とする家である。

免加（免嘉）は、『浦渡氏系図家譜正統』（垣花家）には、四世塩川目差常守の長女で、一六五三（順治十）年九月六日生と記されている。

玄易は、一六八八（康熙二十七年）年戊辰八月八日には狩俣首里大屋子に任じられている。

坊坐は、一六九二（康熙三十一年）年壬申四月十八日には十五歳と

なつて片髪を結っている。特に根拠となる資料はないが、そのときの烏帽子親に、狩俣首里大屋子玄易がなつて、狩俣仁也と名乗らせただのではないだろうか。そして、一七二六（雍正四）年丙午に筑登之座敷に叙せられ狩俣筑登之となり、一七四三（乾隆八）年十月二十四日に黄八巻を賜り、狩俣筑登之親雲上と称するようになった。それから四年後の一七四七（乾隆十二）年丁卯六月二十九日には、寿七十一で死去している。号は「實運快盛」である。

同家の家譜には室や妻の記載はないが、子どもの父母の欄から室や妻の情報を確認することができる。

玄陳の父の欄に「仲宗根豊見親玄雅九代外間長子狩俣首里大屋子玄易」とあるが、生年月日や死去年月日、号は記載されていない<sup>10</sup>。

同母の欄には「浦渡氏塩川目差常□女免加、順治十年癸巳九月六日生、雍正八年庚戌三月六日去、寿七十八、号梅實妙浄」とあり、位牌の右から三番目の戒名「梅實妙浄」が、玄陳の母のものであることが確認できる<sup>11</sup>。

玄陳の妻は狩俣仁也玄往の母の欄に「浦渡氏赤頭仲筋仁也常□女屋真、康熙二十年辛酉八月十日生、乾隆二十五年庚辰八月十四日去」とあるが、号は記載されていない<sup>12</sup>。

玄陳の母免加と妻屋真は、いずれも浦渡氏であるので、『浦渡氏系図家譜正統』（垣花家）を検索してみると、免加と屋真は姑と嫁の関係ではあるが、それよりも前から伯母と姪の関係でもあった<sup>13</sup>。

つまり、浦渡氏四世塩川目差常守の長女が、玄易の多良間島での現地妻（妾）で、常守の長男赤頭仲筋仁也常為の長女が、玄陳の妻屋真である。いえば、免加は息子玄陳に姪の屋真を引き合わせたのである。

玄易は、玄陳が生まれる前に多良間島を去ったと考えられるので、

屋真は実家で玄陳を生んで育てたものと思われる。玄陳（康熙十六年生）と弟常為の長女屋真（同二十年）とは、四歳違いの従兄妹ではあるが、兄妹のように育てられたと思う。

玄陳と妻屋真との間には女子が二人だけで、長女辺計の系図の説明に「忠導氏狩俣仁也玄往妻、母浦渡氏赤頭仲筋仁也常□女屋真、康熙五十年辛卯五月十五日生」とある<sup>14</sup>。父玄陳が三十四歳で母屋真が三十歳のときの子である。次女嘉那の説明には「白川氏川満仁也恵□妻、母同姉辺計、康熙五十四年乙未三月五日生」とある。父が三十八歳で、母が三十四歳である。若い頃には死産と流産を繰り返したのか、高齢で女子二人を元気に育てることができたが、男子には恵まれなかったようである。

長女辺計の夫である九世狩俣仁也玄往の記録には、父母の外に実父と実母の記載がある<sup>15</sup>。実父は向裔氏多良間仁也朝□で、実母は仲筋村百姓仲筋の女松とある。玄往は、一七一三（康熙五十三）年八月十五日の生まれで、童名を多真と叫んだ。

『向裔氏系図家譜支流』（下地家）によれば、父の多良間仁也朝首は、塩川村嶺間の系祖であり、系図の五代玄往の説明に「狩俣仁也、忠導氏狩俣筑登之親雲上玄陳、依無継子、任訟為猶子」とあり、玄陳の猶子となったことが記されている。多真は片髪を結って狩俣仁也玄往と称するようになった<sup>16</sup>。

玄往と辺計の間には、長男玄俗、次男玄為、三男玄合、四男玄扶の男子四人がいた。

玄陳が一七四七（乾隆十二）年に死去した後、長男玄俗は仲筋村百姓塩川女多真兼を妻に迎え、一七五一（乾隆十六）年には長男坊坐が生まれ、祖母屋真を筆頭に、長女辺計と婿の玄往、孫四人とひ孫一人の八人で暮らしていたものと思われる。

ところが、一七五五（乾隆二十）年には突然、辺計が三月二十六日に享年四十五で死去、玄往が二日後の二十八に享年四十二で死去、長男の玄俗がその二日後の三十日に享年二十四、四月十日にはその妻の多真兼が享年二十七で、同日四男の玄扶が享年十二で死去し、三男の玄合が五月十八日に享年十四で死去している。僅か五十日余で六人が死去している。玄為の死去年月日は不詳である。『球陽』などには、この年の気象異常についての記述はないが、家族がバタバタと死んでいった状況から、飢饉などの異常な状態が発生していたのではないだろうか。

残されたのは、七十五歳になった屋真と五歳のひ孫の坊坐の二人だけであった。坊坐は、翌二十一年十二月二十一日には数え六歳で片髪を結い、狩俣仁屋玄当の称するようになったと思われる。それも東の間、曾祖母屋真が一七六〇（乾隆二十五）年八月十四日に寿八十で死去し、この家には数え十歳の玄当だけが残ったことになる。

### 三 忠導氏支流富盛家の位牌

それでは、今回の調査で確認した富盛家の位牌について、見てみることにする。

富盛家の位牌も一枚の板の上部には、蓮華文に日輪を刻み、その

表

裏



實運快盛

仁濟真淨

梅實妙淨

妙圓導徳

靈位

庚戌年三月六日

甲戌日死去

中に大日如来や胎藏界を表す梵字（アークン）の輪郭が線刻されている。その下の四角い枠の中に、四人の戒名と霊位が刻銘されている。位牌は、瑞雲をあしらった外枠にはめ込まれ、表から釘のようなもの四本で止められている。

裏には表の戒名に対応するように四つの札に見立てた枠が線刻されている。「梅實妙淨」の後にあたる部分だけに、「庚戌年三月六日<sup>甲</sup>日死去」と刻まれている。

この四人の戒名を富盛家の『忠導氏系図家譜支流』で検索してみると、前述のとおり「實運快盛」は狩俣筑登之親雲上玄陳である。

俗名と号（戒名）が確認できたのは、八世狩俣筑登之親雲上玄陳と、その母免加（免嘉）の二人だけである。

仲宗根家の位牌の記載の在り方を参考にすると、右から一人目が玄陳で、その左が玄陳の父玄易、その次が玄陳の母、つまり玄易の室免加、最も左が玄陳の室ということになると考えられる。

前述したように、『忠導氏系図家譜支流』には、父玄易と玄陳の室の戒名は記載されていないが、「仁濟真淨」は父玄易の戒名で、「妙圓導徳」は玄陳の室の戒名ということになるだろうか。

玄陳は一七四七（乾隆十二）年六月二十九日に寿七十一で死去し、妻の屋真は（乾隆二十五）年八月十四日に寿八十で死去している。

この位牌の建立年月日は明確ではないが、屋真の死去後にひ孫の玄当が建立したのではないだろうか。

### 四 八世玄易の宮古での室と多良間での妻

玄易の室は、『忠導氏系図家譜正統』<sup>17</sup>には名を龜といい、益茂氏友利屋国仲目差昌広の女で、一六四七（順治四）年九月三日に生

まれ、一七三〇（雍正八）年十月十五日に寿八十四で卒し、良珍と号したとある。

玄易には室亀との間に、一六六九（康熙八）年十一月五日生の長女喜坐良を筆頭に、一六七二（同十一）年三月七日生の次女亀、一六七四（同十三）年十月二十八日生の嫡子山戸（後に下地親雲上玄邑）、一六七六（同十五）年九月十七日生の三女仁喜屋、さらに次男の玄英（平良仁也、小祖大原）、三男玄由（大筆者、小祖大白川）、一六八二（同二十一）年十一月五日生の四女免嘉が生まれている。その後、四男玄典（狩俣筑登之、小祖友知間）、一六八九（同二十八）年九月七日に狩俣村百姓金筑女辺計寿との間にできた五女金免嘉、五男玄年（西里目差、小祖尻住屋）、一六九七（同三十六）年九月三日に多良間島塩川村百姓計志筑女免嘉との間にできた六女嘉那志、六男玄道（東仲宗根与人、小祖尻并）の合わせて二人の子どもが、『忠導氏系図家譜正統』に記載されている。

玄陳は一六七七（同十六）年の生まれであるから、三女仁喜屋の翌年に生まれた次男ということになるが、多良間島での出生であり、玄陳と母免加については、『忠導氏系図家譜正統』にその記載はない。

『浦渡氏系図家譜正統』（垣花家）には、免加（免嘉）は忠導氏狩俣首里大屋子玄<sup>易</sup>が、当島詰役の時の妾であると記されている<sup>18</sup>。

十世狩俣親雲上玄賢が、多良間島塩川村女に生ませた男子武佐は、妾腹の子として、初めて系図に記されているが、生年月日や母の名などは記されていない。また、一七三七（乾隆二）年十一月三日に多良間島塩川村の向裔氏多良間仁也朝次の女保那人との間に生まれた女子亀は、塩川村妾腹の子として系図に記されている<sup>19</sup>。

## おわりに

宮古島で「系図家譜」の編集が始まったのは、一七二九（雍正七）年のことであり、『忠導氏系図家譜正統』が編集されたのが、一七五七（乾隆二十二）年である。旅妻である免加と落とし胤<sup>たね</sup>である玄陳は、『忠導氏系図家譜正統』に掲載されることはなかった。

忠導氏仲宗根家の位牌が建立されたのは、これよりも五〇年余り前の一七一五（康熙五十四）年である。これに刻銘された男性で、氏名や名乗が記載された者は誰一人としていない。記載されているのは、童名と役職名だけである。死去年月日さえもない。

また、忠導氏富盛家の位牌においては、表は戒名だけで、官名や字はないが、裏には免加の死去年月日だけが年号ではなく干支で刻銘されていた。その戒名と死去年月日の刻銘によって、玄陳と免加の二人の人物を特定することができたが、あと二人の人物は、玄陳の父玄易と玄陳の妻屋真であることは想像するに難くないが、富盛家の『忠導氏系図家譜支流』では特定することはできなかった。

玄易は、宮古島忠導氏仲宗根家の大位牌には「潮音慧海禪定門」と刻銘され、多良間島の忠導氏富盛家の位牌には「仁濟真浄」と別戒名で、二か所の位牌に祀られていることになる。

結びに、多良間村字塩川の忠導氏富盛家に案内していただいた多良間村文化財保護委員の友利哲市氏をはじめ、同家の位牌の調査に快く応じていただいた富盛玄三氏、忠導氏仲宗根家の大位牌の裏表の写真を提供していただいた宮古島市総合博物館、その位牌の裏の銘文の翻刻にあたって、岡山大学名誉教授の上原兼善先生、神戸女子大学文学部史学科の知名定寛教授、同僚の先生方のご協力をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

註

- 1 金城善「近代沖縄における戸籍制度の一端―戸籍法の施行から壬申戸籍の改製まで―」『仲松弥秀先生傘寿記念論文集 神・人・村―琉球弧論叢』第一書房 一九九一年 四四五頁
- 金城善『本琉球内久米仲里間切(真謝村)人数改帳』について『久米島自然文化センター紀要』創刊号 二〇〇一年 八〇(一)頁
- 金城善「近世琉球における戸籍制度の一端―宗門手札改と『人数改帳』、そして人別改と『頭数帳』について―」『琉球・アジアの民俗と歴史―比嘉政夫教授退官記念論集―』榕樹書林 二〇〇二年 四六五頁
- 金城善「八重山石垣間切石垣村の『頭数帳』」明治六年十二月十四日付け「戸籍総計」の概要と翻刻―(研究課題番号一三三〇二〇〇一)平成十三年度～平成十六年度科学研究費補助金基盤研究(△)『研究成果報告書 沖縄における近代法の形成と現代における法的諸問題』研究代表者田里修 二〇〇五年 三五―頁
- 金城善「近代沖縄における戸籍法の施行」『沖縄近代法の形成と展開』榕樹書林 二〇一三年 三二―三七頁
- 金城善『本琉球内久米仲里間切人数改帳』の「大文字比嘉にや」とその家族」『久米島博物館紀要』第19号 二〇一九年 六五頁
- 金城善『研究ノート』八重山島石垣間切南風見村の宗門手札改関連断簡―『琉球沖縄歴史』創刊号 琉球沖縄歴史学会 二〇一九年 一(九四)頁
- 2 『多良間村史 第二巻 資料編1 王国時代の記録』一九八六年 多良間村 四九八頁・五五四頁
- 3 金城善「地方の位牌についての一考察―沖縄本等南部系満市高嶺地域の事例から―」『島尻勝太郎・嘉手納宗徳・渡口眞清三先生古希記念論集』ひるぎ社 一九八六年 六七―頁
- 金城善「地方における位牌創設の時期について」『沖縄民俗研究』第35号 沖縄民俗学会 二〇一八年 五一頁
- 4 「(11) 忠導氏系図家譜支流」前掲2 一九二頁
- 5 「25、位牌」『宮古島市総合博物館図録 第一集―旧家資料篇―』二〇一二年 一四頁
- 6 「9 忠導氏仲宗根家位牌」『宮古島市総合博物館開館30周年記念特別展示 宮古の宝 三十選展 図録』二〇一九年 一八頁
- 「忠導氏正統大外間「位牌」(元祖～八世まで)」第46回 特別企画展 忠導氏仲宗根家資料展』二〇〇三年 八頁
- 7 前掲5『旧家資料篇』四五頁
- 8 前掲5『旧家資料篇』四六頁
- 9 「浦渡氏系図家譜正統(垣花家)」『多良間村史 第六巻 資料編5 多良間の系図並に勤書・古文書・御獄・古謡』一九九五年 多良間村 一二三頁
- 10 前掲4 一九五頁
- 11 前掲4 一九五頁
- 12 前掲4 一九五頁
- 13 前掲9 一二三頁の系図、一二五頁の系図説明
- 14 前掲4 一九一頁の系図説明
- 15 前掲4 一九五頁
- 16 「向裔氏系図家譜支流(下地家)」前掲2 一五三頁
- 17 「12、忠導氏系図家譜正統」『平良市史 第三巻 資料編 前近代』平良市役所 一九八一年 三三七頁
- 18 前掲9 一二五頁の系図説明
- 19 前掲17 三三九頁の系図説明

